障害の有無を越えた住みよい杉並を目指す

佐藤弘美さん　障害者の住みよい杉並をつくる会　事務局長

プロフィール：1951（昭和26）年北海道生まれ。高校卒業後、東京都職員になり、杉並区役所土木課へ配属される。1981（昭和56）年から「障害者の住みよい杉並をつくる会」の事務局に入る。2006（平成18）年から、「杉並障害者自立生活支援センターすだち」（杉並区今川2-14-12）の所長となり現在に至る。
障害者の住みよい杉並をつくる会Webサイト：http://www.cagelessstation.org/volu/vol1_index.html
障害者の住みよい杉並をつくる会ブログ：http://tukurukai.exblog.jp/

■意見は一致してから進めればいい

▲施設内のパン工房

国連が、障害者の“完全参加と平等”をテーマに、障害者が社会生活に完全参加し、障害のない人と同等の生活を享受する権利の実現をめざす「国際障害者年」を決議した、1981（昭和56）年。

杉並区内でも、そのインパクトに後押しされるように「障害のある人もない人も、ともに住みよい（精神的・物的・制度的環境に）杉並のまちづくりをめざそう」という動きが起こった。

障害者団体（身体・知的・精神障害など）と、ボランティア団体、労働組合を含む21団体によって、「障害者の住みよい杉並をつくる会」が発足。それぞれの活動を認め合いながら、共通の状況を改善するためには、協同して規模を大きくし、訴える力を持つ必要があった。さまざまな団体が今日まで決裂せずに続けてこれたのは、個人ではなく、団体会員であったからだと佐藤氏は話す。

「やはり、個人だとそれぞれの事情が出てきて続かないのですが、団体であればうまく別の人に引き継いでいただけるんです」

ほとんど団体会員を減らさずに、むしろ増えているという状況は、佐藤氏の人柄もさることながら、運営面での秘訣もあるのではないだろうか。

「あえて言えば、意見が一致したところから進めていくというやり方をしました。いろいろな団体の方が集まっている組織ですから、それぞれの要望や意見を持った人たちが集まっています。ですから、丁寧にひとつずつ実現していくことにしました。一致しないときにはナシにするのではなく、一旦置いておいて、勉強したり、整理したりしながら、次に活かしましょうと。そうやって進めてきたことで、みなさんに納得していただけたと思っています」

区の職員と、障害者・団体、民間の方々での意見の相違はなかったのだろうか。

「区の職員としては、行政が出した新しい障害者関連の情報を正しく伝えられるというメリットがありました。情報は、伝わり方によっては、まったく反対の意味に捉えられることもあります。たとえ、最初に誤解を招く伝わり方をしていたとしても、会議の席で直接お話をすることで、不安や混乱に発展しないで済んだケースも多いように思います」

円滑に会議を進め、着実に実行していく体制が「障害者の住みよい杉並をつくる会」を継続させる原動力となったのだ。

杉並区役所の土木課で勤務していた佐藤氏は、意外にも「土木と福祉」は関係が深いと話す。

「カーブミラーひとつとっても、音で情報を得ることができない聴覚障害者にとっては、とても役に立つんです。視覚障害者であれば、点字ブロックや音声は欠かせません。わかりやすい表示をすれば、知覚障害者のためにもなります」

佐藤氏自身も足を骨折して、一時的に車椅子生活を送ったときに、まだまだ解決されていない不便さがあると実感したそうだ。バリアフリーは、さらなる改善の余地があると言える。

■高円寺の夏の夜を彩る「希望連」の舞い

▲サポーターと一緒に踊る

「障害者の住みよい杉並をつくる会」が継続できているもうひとつの理由は、内側で議論するだけでなく、積極的に外へ出て行くことにある。たとえば、2006（平成18）年で50周年を迎えた「東京高円寺阿波おどり」。

現在では、杉並区のみならず東京の夏の風物詩となっている一大イベントだが、その舞台を毎年飾る連のひとつ「希望連」も、「障害者の住みよい杉並をつくる会」の活動の一部だ。

会が発足した1981（昭和56）年から参加し、2006（平成18）年には25周年。恐る恐る申し出た参加表明に、意外にもあっさりと「いいよ」と受け入れてくれたのが、「NPO法人東京高円寺阿波おどり振興協会」だった。出られることが決まったあとは、本人の了解と家族の理解が必要となる。

「親御さんたちには、自分たちの子どもを見世物にしたくないという気持ちと、事故の

↗

↘

心配の2つがありました。心理的な面については、普通にみんなで楽しみたいという気持ちを何度も説明するしかありません。事故については、迷子対策として1対1でボランティアをつけ、発作対策としては、連の中に看護婦さんを2人と、近所のお医者さんに掛け合って、何かあったらすぐ来てもらえるように手配をしました。それが、5、6年続いたでしょうか」

これまで25年間、迷子も事故もない。途中からは看護婦や医者を手配する必要もなくなり、家族からの理解と信頼を得られるようになった。参加する本人たちも「ヤットセ～」と、大きな掛け声をあげながら、自分なりに満足いく表現もできるようになっている。

「この取り組みで、一番いいと思っているのは、何十万人という観客の前で、本人たちが楽しんでいる姿を率直に見せて、応援してもらえることです」

常連となった「希望連」の出演者は、「今年も来たね」「がんばってね」と街中で声を掛けられる機会が増えたという。

「一回目に出演したときには、観客の反応は両極端だったんですよ。ものすごく感激して涙ながらに拍手している人、今にも逃げ出しそうなギョッとした顔をしている人。それだけ当時は、普段、障害者と接する機会が少なかったんだと思います。でもね、年々繰り返し参加していくうちに、そういった極端な顔をする人が少なくなっていきました」

杉並区が、障害のある人にもない人にも住みよい街になって欲しい――。そんな願いを込めてつけられた「希望連」という名前。「あと何年続くかわからないですよ」と佐藤氏は話すが、出演者のためにも、踊りを楽しみにしている観客のためにも、ぜひ長く続けてもらいたい。

■障害者が地域に入っていくための施設

「この施設に出向することになったのは、いろいろなイベントを行なったり、講演したりするだけでなく、本気で障害者の方々が地域に入っていけるよう支援しなさいということだと思っています」

2006（平成18）年4月、今川二丁目にオープンした「杉並障害者自立生活支援センターすだち」。所長に就任した佐藤氏は、施設を建設する準備段階から関わってきた。

▲感性豊かな作品です

「実は、建設するまでには、計画よりも1年以上長い期間が必要でした。近隣には、まだ障害者についてご存じない方が多かったんです。まずは誤解をとき、不安感を取り除くことが先決でした。障害者を地域に入っていけるように支援する施設をつくるからには、少しでも地域の方々に納得・理解していただかなければ意味がありません。十数回の会合を持ち、そのつどニュースにまとめて、周辺の千世帯以上に配布しました」

その甲斐あって、念願のオープンを迎えた通過型入所施設「杉並育成園　すだちの里すぎなみ」。そこに併設されたのが「杉並障害者自立生活支援センターすだち」だった。

センター内は、開放的で入りやすいフリースペースとなっている。「ボランティアをやりたい」「いろいろと教えてもらいたい」など、遊びに来てくれたり、応援してくれたりする地域の方々も増えたという。明るく使いやすいスペースにしようとしてきたスタッフの努力の賜物だと言える。

■ちょっとした日常の声掛けから始めよう

▲施設の全景

「最近、相談される内容は少しずつ重たいものになってきたように思います」

もちろん、佐藤氏が言う重たいは「負担」という意味ではない。事情がわかるからこそ「より適切な自立支援を」という責任の重みなのだ。

「『すだちの里すぎなみ』は、通過型（3年目途）の入所施設です。障害者の方々は、一定の期間内に、自分なりの力をつけて地域で生活をするのが、入るときの約束事です」

地域に移って住んだり、働いたりする場所を見つけるなど、入所当時よりも自立した生活を送れるようになるのが、本人たちにとって一番の幸せだ。

「ただ、そのためには、障害者を受け入れる地域の環境整備が大切なんです。もしかすると、そこまでは支援センターの責任ではないかもしれません。でも、〈支援〉という看板を掲げている以上、障害者の方々の生活の〈質〉が向上することを望まずにはいられないんです」

比較的症状の重い障害者が住むケアホーム。それらを運営する事業者やヘルパーなどの支援者が、まだまだ不足していると佐藤氏は話す。

「ただ、何も難しく考えることはありません。たとえば、障害者がお店で買い物をしていて、困っていたり、間違った行動をしていたりしたら、理解してガイドしてくれるだけでも構わないんです」

専門的な知識や技能がなくても、ちょっとした声掛けやサポート、見守りくらいならば、誰にでもできるはずだ。そういった何気ない行動が、障害者の住みよいまちをつくっていく。

「人間は、食べることと働くことだけが日常生活ではありません。人として豊かな時間というのは、行政サービスだけでは、まかなうことができないんです。何月何日にどこそこに行かなきゃできないのが、ボランティアではないんですね。お店や自宅にいながら、または電車やまちの中で、障害者に気軽に声を掛けてくれる人が増えていけば嬉しいです」

日常のちょっとした場面での人と人とのふれあい。障害があるないに関わらず、失いつつあるコミュニケーションである。ボランティアとひとくくりでまとめることなく、できることから始めるのが、誰にとっても住みよいまちをつくる第一歩となるのだ。　（文：佐竹未希）